女子大國文　第百六十六号　令和二年一月三十一日

三条西実隆における『伊勢物語』摂取と注釈

小山順子

はじめに

『伊勢物語』注釈を残した歌人は数多い。『伊勢物語』注釈史において名を残す人物が、おおむね学者・文化人として高名である以上、和歌にも深く関わっていることは必然である。室町時代に限定しても、正徹、一条兼良、宗祇、堯恵等が想起される。

では、『伊勢物語』に精通し注釈を残した歌人たちが、積極的に『伊勢物語』から表現を摂取した和歌を詠んでいるかというと、一概にそうとは言えない。和歌に『伊勢物語』を用いようという明確な問題意識のもとに試みられるのであり、読解や知識の豊かさと、それを和歌の表現に活かすことは、位相の異なる問題である。

『伊勢物語』を、自身の和歌表現に積極的に取り入れた注釈者として注目されるのが、三条西実隆である。実隆は、『伊勢物語』享受史において重要な役割を果たした人物である。現在、我々が通常用いている『伊勢物語』本文は、

実隆が藤原定家筆天福本を書写した三条西家本を底本とすることが多い。[1] また、先行研究[2]が実隆の講釈・注釈についてまとめているように、実隆は生涯に十度を超える講釈を行ったことが知られている。そのうち、永正六年（一五〇九）三月二十六日～四月二十一日の講釈は『伊語聴説』[3]、大永二（一五二二）年五月の講釈は『伊勢物語惟清抄』、大永三年（一五二三）五月・大永八年（一五二八）三月の講釈は『逍談称聴』、天文四年（一五三五）三月の講釈は『逍談称聴』『覚桜注』に残されている。

実隆は豊富な注釈を残し、和学の家・三条西家の『伊勢物語』注釈の基礎を築いた。さらに、実隆の和歌表現には、『伊勢物語』から摂取した詞が散見する。しかもそれら『伊勢物語』を摂取した表現は、先行和歌の例を見ない実隆独自のものも多い。

小稿では、実隆の詠作に見る『伊勢物語』摂取を検討し、実隆自身および注釈・講釈がどのように和歌詠作に活かされているか、室町時代後期の和歌と『伊勢物語』の関係について考察することを目的とする。

一、従来の『伊勢物語』摂取と実隆の摂取

実隆の『伊勢物語』摂取についての具体的な検討を始める前に、従来の『伊勢物語』摂取がどのようになされていたのか、既に旧稿[4]で論じたところではあるので、概略を確認しておく。

後世の文学が『伊勢物語』を摂取して利用する場合、主に用いられるのは作中和歌である。これは、藤原定家『詠歌大概』の冒頭「常観二念古歌之景気一可レ染レ心。殊可二見習一者、古今・伊勢物語・後撰・拾遺・三十六人集之中殊上手歌、可レ懸レ心［人麿・貫之・忠岑・伊勢・小町等之類］」に示されているように、『伊勢物語』は物語としてではなく、歌集として扱われていたからである。通常、物語作中和歌は勅撰和歌集の撰集対象とはならないという原則があ

るにもかかわらず、『伊勢物語』所収歌には勅撰和歌集に入集するものが多い。つまり『伊勢物語』所収和歌は、物語和歌とは異なる扱いを受けていた。『伊勢物語』は歌集の扱いで、和歌を〈主〉とし、物語の地の文は〈従〉であると考えられていたために、『伊勢物語』を典拠とする詞は和歌から選ばれることが主だった。院政期の藤原清輔も『袋草紙』で『伊勢物語』を歌集として扱っており、また清輔が『和歌初学抄』において『伊勢物語』を典拠とする二十七の詞を抜き書きした部分があるが、それらは全て和歌からの詞である。

なお和歌から引用された詞以外にも、『伊勢物語』の文脈を想起させるキイワードとなるのが、歌枕の名称である。東下りの章段を中心として、物語に登場する地名は、その地で展開した物語を想起させる機能を持つキイワードとして引用される詞となる。『伊勢物語』を典拠とすると認識される詞を、本稿では以下、『源氏物語』のそれを「源氏詞」と呼ぶのにならい、「伊勢詞」と呼ぶ。

こうした傾向は実隆にもおおむね共通している。しかし実隆が和歌に摂取して用いる伊勢詞は、従来の『伊勢物語』摂取の範囲から逸脱するものがある。特に、地の文から取った伊勢詞が散見するのが特徴で、実隆以前に用例の無い、もしくは新編国歌大観・新編私家集大成の範囲で、実隆にしか用例の見えないものもある。ここでは特に、実隆以前に和歌に摂取された例が見いだせないもの、もしくは新編国歌大観・新編私家集大成の範囲で実隆にしか見いだせない伊勢詞の摂取例を挙げる（実隆にしか例が無いものに＊を付す）。

同日、京へかへりまうでくとて、船のうへにて三山（上）を見て

＊とみかうみみかみの山のさきになり跡になり行船のうへ哉　（『再昌草』三一〇七・永正十三年四月十九日）[1516]

→この女、かくかきをきたるを、けしう、心をくべきこともおぼえぬを、なにゝよりてか、かゝらむと、いといたうなきて、いづかたにもとめゆかむと、かどにいでゝ、と見かう見、ゝけれど、いづこをはかりともおぼえ

ざりければ、……（二一段）

あはじともいはで過しやつれなさのみさほなるへきはじめ成けん

（『雪玉集』七三四〇・詠百首和歌・恋・不逢恋／同・一八七五にも重出）

→むかし、おとこ有けり。「あはじ」ともいはざりける女の、さすがなりけるがもとに、いひやりける。（二五段）

＊おもしろき此ことの葉もとく法の阿褥たらとぞ腹にあぢはふ

（『再昌草』四四〇・文亀四年（1504）四月十四日「親栄鱈をゝくるとて／返し」）

→このうたは、あるがなかにおもしろければ、心とゞめてよまず、はらにあぢはひて。（四四段）

恋しさはますみのかゞみかけてのみかた時さらず影にみへつゝ

（『雪玉集』五六七五・大永四年（1524）仲冬聖廟奉納詠三十首和歌・増恋）

→むかし、おとこ、いとうるはしき友ありけり。かた時さらずあひ思ひけるを、人のくにへいきけるを、いとあはれとおもひて、わかれにけり。（四六段）

（注・夢庵へ）返事、五句をわかちて、五首を詠侍し

うづもれしむばらからたち雪とけてそばのかきねに春もみへけり　（『再昌草』二一三五・永正九年（1512）一月二十日）

霜こほる（とづ）うばらからたちいくへとか分迷ふ陰にかりくらすらん　（『集雪追加』二八三・鷹狩）

→……とて、いでたつけしきを見て、むばら、からたちにかゝりて、家にきてうちふせり。（六三段）

＊あまれりやたらずやとだになにか思ふけふのまゝなるあすもしらじを

（『雪玉集』七二四四・永正十七年（1520）八月住吉法楽百首・述懐）

→ゐなか人のうたにては、あまれりや、たらずや。（八七段）

七例を挙げた。いずれも地の文からの詞であり、かつ地名等の固有名詞ではない。しかも、「うばらからたち」以外は場面の情景を構成する素材ではなく、状況説明や、草子地の評言から詞を摂取している。

地の文の詞を和歌に用いる歌人は、院政期以来[5]、和歌史を通じて存在した。俊成[6]や定家は『伊勢物語』の本説取りを数多く詠み、地の文の詞も用いている。他にも、実隆に影響を与えた正徹[7]（正徹については後に詳述する）やその弟子・正広、実隆の和歌の師であった飛鳥井雅親が、いずれも地の文の詞を和歌に摂取した例を多く見いだせる歌人である。こうした先行の歌人と重なる例もあるが、それにとどまらず、実隆は新たな詞に着目して和歌に摂取している。掲出した七例の伊勢詞は、説明的・散文的と言ってもよく、和歌には摂取されなかったものだった。このような詞を積極的に用いる実隆の姿勢をまず指摘しうる。

二、旧注による読解と和歌表現

作中和歌の詞や歌枕のみならず、地の文にも細かく目を行き届かせて、自身の和歌表現に摂取するという方向性は、この時代、和歌のみならず連歌にも見いだせる。これが『伊勢物語』講釈や注釈によって『伊勢物語』への関心が高まった後柏原天皇[8]時代の特徴であることについては、旧稿[9]でも指摘した。

そこで、注釈書と和歌表現が深く関わる摂取例として、〝空高く飛ぶ（行く）蛍〟について取り上げる。この素材を実隆は繰り返し和歌に詠んでいる。

空たかくゆけばほたるの水の上にながるゝかげもきえかへりつゝ

（『雪玉集』四九一八・永正三[1506]後五十八侍従大納言家着到百首和歌・蛍）

たかくとぶ影もたえ〴〵あらはれてくれ行空を蛍にぞ見る

（『再昌草』一〇六六・永正四年[1507]四月十一日荻野弥十郎夢想太神宮法楽和歌（題政為）・「夏夕」）

した水にみえしはきへてあしの原のそよ空たかくゆく蛍かな

（『再昌草』二三九〇・永正十年[1513]一月十四日三十首和歌「水辺蛍」／『雪玉集』五七六二・第三句「蘆のはの」）

すみわたる陰をたづねてあまの川ありとやたかくゆくほたるかな

（『雪玉集』三六八六・永正十年[1513]九月堀河題百首・夏・蛍）

水の上の光も消て空たかく行るもみえずとぶほたるかな

（『集雪追加』一二七・夏・蛍）

空高く飛んで行く蛍は、一見なにげない素材・表現であるように思えるが、室町時代後期の和歌にいたってから散見し始めるものである。詠作年次が判明する最も早い例は、掲出例の一首目、実隆の永正三年（一五〇六）の詠である。他の歌人では、下冷泉政為が永正五年に詠んだ「空たかくのぼる蛍は雨くらきよるとて見えぬ思ひならめや」（『碧玉集』三〇七「雨中蛍」）、また詠歌年次は不詳であるが、後柏原天皇にも「影たかくみしや蛍もくるゝよの空よりくだる草の上の露」（『柏玉集』五七四「草蛍似露」）の例がある。他にも、実隆の息子である公条の「すゞしくも空に暮行夏の日の光たかくもとぶほたるかな」（『称名院家集』四四三「晩夏蛍／永正十二[15]三十首」）、後柏原天皇の息子である後奈良天皇の「空たかく飛やほたるの影ながら下ゆく水の下にみえつゝ」（毛利元道蔵『宸翰英華（後奈良天皇）』大永八年[1528]五月二十五日月次御会「水上蛍」）の例が見られる。

この〝空高く飛ぶ（行く）蛍〟は、『伊勢物語』四五段の、次の箇所から摂取されたものであると考えられる。男に想いを寄せていた女が、恋煩いのため病に伏せる。病床で両親に、男に対する思いを打ち明け、驚いた両親は男に事情を話して来てもらうが、女は亡くなってしまった。死の穢れに遭った男は、籠もってつれづれを過ごす。物語の末尾の本文を掲出する。

……時はみな月のつごもり、いとあつきころをひに、夜ゐはあそびをりて、夜ふけて、やゝすゞしき風ふきけり。ほたるたかく飛あがる。このおとこ、見ふせりて、

ゆくほたる雲のうへまでいぬべくは秋風ふくとかりにつげこせ（四五段）

さて、この箇所についての古注による解釈は、以下のようなものであった。

時ハミナ月ノ晦日トハ、貞観六年六月晦日也。「行螢」ノ歌ノ意ハ、此螢、雲ノ上マデ飛アガラバ、煙ト成テ、雲ニ入シ人、秋風フクト、我ニ告ヲコセヨト云也。

（『十巻本伊勢物語注』）

時は六月晦日とは、貞観十六年六月晦日なり。（中略）歌に「行蛍秋風ふくとかりに告こせ」とは、蛍雲上にゆきたらば、彼女の死たるやうをつげよ。実に恋のやまひにて死たるかと云也。四きに秋をやまひにとればかくよむなり。かり、雁には非ず。我がり許つげ告よ也。妹許（ガリ）など、おなじ事也。彼女、内裏に宮仕へば、雲のうへと云なり。又煙と成也。雲にのぼりたる事をいふ也。

（『冷泉家流伊勢物語抄』）

冷泉家流古注では、この章段が貞観六年（八六四）または同十六年（八七四）の六月晦日のことであると注し、地の文に関してはそれ以上の解説は無い。古注は「雲の上」を内裏の象徴、または「雲の上まで去ぬ」が死を象徴すると解している。また「かり」は接尾語「がり」であり、雁の意は取らないと注す。

こうした解釈を離れて新たな読み方を示したのが、旧注、それも宗祇であった。宗祇は『肖聞抄』で次のように述べている。文明十二年本の本文を掲出する。

六月の、此段詞以下能々思惟すべし。時節の気暑熱のくるしさ、やう〳〵散じて、夜更て涼風うち吹たる時節を思ふべし。

行蛍雲のうへまで、此歌心尤余情おほし。感情ふかし。あつき頃をひ、宵はあそびて、さ夜更る頃、風いと身に

しむばかり吹て、涼しささらに中秋の天の心したる折ふし、蛍のたかくとぶを見て、はや雁も渡るべき程の心ちすれば、雁につげこせとよめる也。いかにも吟味して時の景をおもふべきにや。古注説いかゞとぞ。後撰の秋部にあり。　（『文明十二年本肖聞抄』）

『肖聞抄』の文明九年本・延徳三年本でも本文に大異は無いが、文明九年本の行間に書き入れられた小文字注には、「蛍高く飛び上がる」について、「蛍タカウ、特此詞面白。其時ノサマヲ心ニシメテヨク〳〵思ツラヌベシ」とある。この場面の時期は六月晦日、つまり夏の最終日である。夏が終わる日であるとはいえ、日中から宵まではまだまだ暑い。しかし夜更けになると、風が涼しく吹いて秋の気配を感じさせる。涼しさの中で蛍が高く飛び上がって行くのを見て、そろそろ雁がやってくる季節だと思いを馳せる。夏の最後の日の夜更け、という時節を表現する上で、「蛍高く飛び上がる」が重要な一節となっていることを指摘するのだ。

この指摘は一条兼良『伊勢物語愚見抄』にも見られず、旧注でも宗祇に至ってから見いだせる読解である。宗祇系の聞書である『伊勢物語山口記』と『伊勢物語宗長聞書』でもおおよそ同じ旨のことが記されている。特に傍線部「蛍のたかくとぶを見て…」以下に該当する部分を挙げると、「螢の高くあがるをみて、雁もはや軈而来ぬべき心地して、身にしむばかりの空をながめてよめる歌也。景気誠にこゝろにうかぶ歌なり」（『伊勢物語山口記』）「蛍のうちひかりてたかくとぶを見て、はや雁もわたりぬべきほどの心ちし侍れば、『かりにつげこせ』といへる也。いかにもその折節に心をやりて吟味すべし」（『伊勢物語宗長聞書』）と注されている。宗祇が四五段を読み解く際、この箇所は注目すべき情景描写として取り上げられていたのだ。

宗祇の読解は、文明十七年（一四八五）と長享元年（一四八七）に宗祇の講釈を受けた実隆にも継承されている。『伊語聴説』『逍談称聴』には該当する記述は無いが、『惟清抄』には、「蛍タカウ飛アガル　何トヤラン、風情面白也」、

『覚桜注』にも、「ほたるたかくとび(面白キ詞ツバキ也)あがる」とあり、宗祇と同様にまずこの詞の面白さを評価する。『惟清抄』では、「行く螢…」の歌に、以下のように注する。

後撰ニハ、秋ノ部ニ入タリ。雁ヲ本ニシタルニヤ。此(コヽ)ハ夏ノ歌也。ヨヰノ程ハ暑気甚シキヤウナルガ、夜深テ、身ニシム風ノ吹テ、仲秋八月ノ天ノヤウニ、オボユルニ、折節蛍ガ、高クトブ也。「蒹葭水暗(シテ)蛍知レ夜」ノ体也。トク雁ヲモ、モヨホシタテヨト云心也。

概ね宗祇の注釈を継承していることが看取される。さらに「蒹葭水暗蛍知レ夜」(『和漢朗詠集』夏・蛍・一八七・許渾)の詩句を引用しているのは、蛍火によって夜闇の暗さを意識することを指摘していると考えられる。また、「蛍火乱飛秋已近」(『和漢朗詠集』夏・蛍・一八六・元稹)に詠まれるように、蛍が秋の近いことを意識させる素材であることも踏まえると、蛍が飛ぶのが六月晦日の場面によく適っていることが理解できる。宗祇も指摘するように、「行く蛍…」の歌は『後撰集』秋上(二五二「題しらず」)に入集しており、ここでは秋歌と理解されているのであるが、宗祇と実隆は、あくまで夏の終わりの景である点に興趣があることを指摘しているのだ。

蛍を「行く」と表現するのは和歌を踏まえたものだが、「高く」という形容詞を伴うのは、地の文に依拠しながら、さらに和歌の「雲のうへまでいぬべく」の意をも凝縮して込めることができるからであると考えられる。しかしそれにとどまらず、〝蛍の高く飛ぶ(行く)〟という情景描写が、『伊勢物語』四五段の場面と密接に関わる魅力があると評価され、発見されたものだった点に注目されるのである。

この発見は、旧注の注釈方法と密接に関わるものであると考えられる。古注の注釈方法とは、事件のすべてに年月日を、登場人物のすべてに実在人物の名をあて、また物語に隠された「下の心」を読み取ることに中心があった。一方、旧注は、一条兼良が『伊勢物語愚見抄』で「来歴と引のせたる和漢の書典、一としてまことあることなし。昔物

語の本意をうしなふのみならず、詞花言葉のたよりにも成がたし。末学のともがら、ゆめ〳〵信用すべからず。邪路におもむかん事うたがふべからず」と、鎌倉時代以来の古注を否定し、信用できないとするところから始まった。特に宗祇が打ち出した「いかに読むべきか、いかに物語化されていると見るべきかを重視して注釈する」「鑑賞を重んじる姿勢」[10]は、講釈を受け、宗祇流の読解を引き継いだ堂上公家たちに、『伊勢物語』に対するより深く細やかな目を養ったものと考えられる。実隆たち室町時代後期の歌人が和歌に〝蛍の高く飛ぶ（行く）〟をいう素材を用い始めた背景には、講釈を通じた丁寧な読解による発見があったと推測される。物語本文に基づきながら、細やかに表現と意味を汲み取って取り入れることを旨とした実隆の『伊勢物語』摂取が、旧注による丁寧な読解を基盤としたものであったことを確認しておく。

三、注釈における難義箇所

次に、実隆が和歌に用いている詞が、和歌に先行例を見ないものであり、さらに注釈に取り上げられている例について検討する。『伊勢物語』の注釈間で解釈が分かれているのが、次の「われて逢はむ」である。

われてあはん心も人をしづそでとおもひこがるゝよゐのともしび

（『再昌草』三四二六・永正十五年[1518]二月「廿四日、遣真光院僧正許／忍待恋」）

この「われて逢はむ」は、業平と伊勢斎宮との密通を描いた六九段の、「二日といふ夜、おとこ、われてあはむといふ」から摂取したものであると考えられる。

「われて逢はむ」は古来、解釈が分かれている箇所である。大きく分けると、「われてあはむ」が男の言葉であると解するものと、「われて『逢はむ』」すなわち「逢はむ」のみが男の言葉で、「われて」はそれに掛かる修飾語で地の文

であると解するものである。前者の立場での現代語訳は「『ぜひとも逢おう』と言う」（鈴木日出男『伊勢物語評解』平25・筑摩書房）、後者の立場での現代語訳は「たまらなくなって、『逢おう』と言う」（片桐洋一『伊勢物語全読解』平25・和泉書院）となる。

では、この実隆歌はどのように解するべきだろうか。実隆の講釈聞書を見ると、「われて逢はむ」の箇所について、以下のような解釈が記されている。

われては、わりなくあはん也。又、二になりてあはん、両様也。わりなくを用。（『伊語聴説』）

ワレテアハムトイフ、ワレテモ末ニアハントゾ思フト、崇徳院ノ御製タリ。ワリナクアハント云心也。（『惟清抄』）

わりなふあはん也。われても末にあはんとぞ思、同心也。（『逍談称聴』）

ワレテハ、ワリナクアハント也。ワカレテノ心ハアラズ。（『覚桜注』）

実隆の解釈は、一貫して「われて逢はむ」を男の言葉と取り、「われて」とは「わりなく」と同じ意、つまり、「どうしても、何があっても」の意であると解している。つまり、「われて逢はむ」を男の言葉と取っていることになる。歌意は、「何としてでも逢いたいという心も、倭文織りの模様のように乱れ思い焦がれている宵の灯火であるよ」となる。何としてでも逢いたいと思い乱れる恋情を、倭文織りの乱れた模様に重ね合わせながら、宵の灯火をじっと見つめている場面である。

この一首は、「われて逢はむ」が六九段の地の文にある男の言葉であることに気付くと、一首そのものが章段を踏まえて詠んだものであると了解される。つまり、「われて逢はむ」と求愛した男であったが、「人めしげゝれば、えあはず」つまり、なかなか斎宮に逢えない。斎宮が男のもとを訪れたのは、「ねひとつ許」であり、待つ間、男は「ねられざりければ、とのかたを見いだしてふせる」という状況だった。斎宮に求愛し彼女との逢瀬を待ちわびる男の心情が、

宵の間どのようなものだったのかを想像して詠んだのが、この一首であると解せる。なお、この歌の題は「忍待恋」である。人目を忍び、誰にも知られないように待つ恋という題に、禁忌の恋の相手である斎宮を待つという場面はよく適っている。そして、男が斎宮に求愛した言葉であり、かつ男の熱烈な恋心を表現する詞として、「われて逢はむ」はこの恋を想起させる上で重要なキイワードになる。題から六九段を踏まえることを発想し、章段を喚起させる詞すなわち〈伊勢詞〉として、「われて逢はむ」を用いたと考えられるのである。

実隆の講釈聞書との対応は、実隆詠がどのような意味でこれらの詞を用いているかを知る材料となる。しかしそれだけではなく、講釈聞書が示すのは、これらの箇所が注釈において問題となる難義語であり、注目されてきたものだったという事実でもある。実隆がこの詞に目を留めるきっかけとなったのは、講釈・注釈における難義語の解説であったと考えられる。講釈・注釈を通じて、これらの地の文の詞が、『伊勢物語』中で重要かつ特異な詞として認識され、物語を喚起する〈伊勢詞〉としての固有性を持つようになったという過程を想定できる。

講釈によって取り上げられた詞が、一首に物語を呼び込み、またその物語が和歌に詠まれる状況と重なることを示す〈伊勢詞〉として用いられているのは、次の「あるものかとも思」も同様である。

いかさまにおどろかしてんいまは世にある物かともおもはれじみを

（『再昌草』四二七〇・大永二年[1522]十月「廿四日、公宴短冊／忘恋」／『雪玉集』七九九五）

この歌の第四句「あるものかとも思（はれじ）」は、一九段の傍線部を用いたものである。

昔、おとこ、宮づかへしける女の方に、ごたちなりける人をあひしりたりける、ほどもなくかれにけり。おなじところなれば、女のめには見ゆる物から、おとこは、ある物かとも思たらず。……（一九段）

宮仕えする女房との短い関係の後、女は別れた男の姿を目にするが、男は全く女のことを意識もしていない。それ

を恨み、女は「あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆる物から」を詠んだ、というのが一九段の内容である。

実隆歌の意は「どうやってあの人の注意を引こうか。今となってはこの世に存在しているとも思われていないであろうこの身を」。題の「忘恋」を表現する上で、「あるものかとも思」によって喚起される本説の一九段は、よく適った内容の章段である。さらに、男の意識から女がこぼれ落ち、女を忘れ去ってしまっていることを示すのが「あるものかとも思（たらず）」の箇所である。「あるものかとも思たらず」について、『惟清抄』には記述が無いが、『伊語聴説』は「男のかたよりかれたるを恨也」、『覚桜注』は「女ハメニカクレドモ、男ハナニトモシラズト也」と注している。つまりこの詞は、実隆が歌題の「忘恋」を表現する要となっているのである。

なおこの章段の贈答歌は、『古今集』恋五にも入集している。実隆は著名な「天雲の…」歌を本歌取りするのではなく、地の文の「あるものかとも思」を〈伊勢詞〉として踏まえることで、章段を喚起させているのである。

章段が著名歌を含んでいるにもかかわらず、和歌ではなく地の文の詞を用いて章段を喚起させているのは、次の例も同様である。

やどもがな行さきおほく残る日の影すくなくも時雨きにけり（『雪玉集』一五六三「行路時雨／文亀元十御月次」）[150]

この「行くさきおほく」は、六段の芥川の場面から取った詞である。

……草のうへにをきたりけるつゆを、「かれはなにぞ」となん、おとこにとひける。ゆくさきおほく、夜もふけにければ、おにある所ともしらで、神さへいといみじうなり、あめもいたうふりければ…（六段）

六段には「しらたまかなにぞと人のとひし時つゆとこたへてけなましものを」の和歌が含まれているが、実隆は和歌ではなく、地の文から「行く先おほく」を取った。地の文には続く文章に「雨もいたう降りければ」とある。女を

連れ出して背負い、先を急ぐ途上で雨に降られるというこの場面は、題の「行路時雨」を詠むのに適っている。実隆歌の歌意は「宿が欲しい。これから行く先の道のりは遠く、しかも残る陽光が少ない暮れ方になって時雨が降ってきた」。なお六段の「行く先多く」には、「行路ノ遠ヲ云」（『惟清抄』）・「行サキトヲキト云心也」（『覚桜注』）と注されている。「行く先」に下接するのは「多し」より「遠し」の方が自然で理解しやすい。やや違和感のあるその言葉続きが、伊勢詞としての固有性となっていると考えられる。

このように、実隆は章段の中心を担う和歌ではなく、地の文の詞を用いて、章段の内容を喚起させている。それには、いくつかの理由と意図を考えることができる。

第一に、先行摂取例も多く、本歌として用いられることが定型化した作中和歌の詞より、地の文からの詞の利用は目新しいという点である。先行歌との差異化をはかりやすい一方で、踏まえるのは『伊勢物語』という古典の、しかも著名和歌を含む章段であるということで、喚起力も高い。いわば、著名章段を摂取する古典的姿勢と、取る部分の意外性を両立することができる方法である。

第二に、それぞれの章段が収める作中和歌は、勅撰和歌集に入集する著名歌であるが、勅撰和歌集における詞書はそれぞれ、六九段「君やこし…」が「業平朝臣の伊勢のくににまかりたりける時、斎宮なりける人にいとみそかにあひて、又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける」（『古今集』恋三・六四五）、一九段「天雲の…」が「業平朝臣きのありつねがむすめにすみけるを、うらむることありて、しばしのあひだ、ひるはきてゆふさりはかへりのみしければ、よみてつかはしける」（『古今集』恋五・七八四）、六段「白玉か…」が「題しらず」（『新古今集』哀傷・八五一）である。つまり、勅撰和歌集の詞書に「われて逢はむ」「あるものかとも思」「行く先おほく」は見られず、これらは勅撰和歌集ではなく『伊勢物語』を典拠とする詞であるということを示せ

る。

第三に、和歌は確かに章段の中心を担うものではあるが、詳細・微細な情景描写や心理描写を担うのは地の文であるという点である。その場面の具体的な情報は地の文で表される以上、歌題に則した場面を和歌一首の中に設定しようとする時、題を的確に表現する場面をある章段に求め、最も端的に題を表現する詞を章段から選び出す際に、地の文まで視野に入れると、より的確な詞を見いだしえたと考えられる。つまり、少なくとも本節で取り上げてきたような、歌題の表現と密接に関わる〈伊勢詞〉については、使いたい〈詞〉が先にあって和歌に用いたのではなく、使いたい章段がまずあり、そこからキイワードとなりうる詞を選んだ、という順番であったと推測される。

『伊勢物語』の場合は、第一節にも述べたように歌集として扱われていたため、『伊勢物語』の地の文が、歌集の詞書と同様に、和歌を〈主〉とし、その〈従〉すなわち説明の役割を担うものだと捉えられがちだった。しかし、地の文は詞書とは異なる。地の文の心情描写や情景描写には、単なる説明の役割にとどまらない描写力がある。地の文の描写は、作中和歌と相まって、その場面をより鮮明に浮かび上がらせる効果を持つ。『伊勢物語』が歌書ではなく物語であるのは地の文が存在するからだ、というのは、きわめて単純な事実ではある。実隆は『伊勢物語』の地の文の詞を、その章段を代表させる〈伊勢詞〉として活かそうとしたのである。

四、場面の再構成

これまで和歌に取り入れられなかった地の文の詞を和歌に用いるという方法は、特徴のある詞を引用するにとどまらない。実隆の方法で注目されるのは、複数の詞を用いて、章段の場面を喚起させるというものである。

廿七日、内裏にて、題をさぐりて卅首歌つかうまつりしに／羈中渡

いそげどもひとりふたりをわたし守程なき船に日も暮ぬべし

（『再昌草』三九七九・永正十八年（1521）二月／『雪玉集』八〇九三）

↓むかし、おとこ有けり。京やすみうかりけん、あづまの方にゆきて、すみ所もとむとて、ともとする人、ひとりふたりしてゆきけり。……（八段）

↓……もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。……その河のほとりにむれゐて、おもひやれば、かぎりなくとをくもきにけるかな、とわびあへるに、わたしもり、はやふねにのれ、日もくれぬといふに、……

（九段）

あばらなる板まそひ行月かげにこぞはと忍ぶむめのした風

（『雪玉集』三九六四・明応五年（1496）秋内大臣家百首題百首・春・夜梅）

↓……又のとしのむ月に、むめの花ざかりに、こぞをこひていきて、たちて見、ゐて見、ゝれど、こぞにこそにるべくもあらず。うちなきて、あばらなるいたじきに、月のかたぶくまでふせりて、こぞを思いでゝよめる。

月やあらぬ春や昔のはるならぬわが身ひとつはもとの身にして（四段）

「ひとりふたり」「渡し守」「舟」「日も暮れ」は、それぞれ単独では『伊勢物語』の文脈を想起させるほどの特徴や固有性を持たない詞である。しかし、それらが一首の中で合わせて用いられると、隅田川の場面を背景とすることが浮かび上がる。九段の本説取りに頻用される「隅田川」という地名や、「名にし負はば…」の和歌を用いずとも、業平の東下りを背景とする「羈中渡」を表現することができる。ここに詠まれているのは、業平と友人が隅田川を渡る情景なのである。

また、「あばらなる…」歌の「あばらなる板間」という詞は、「あばらなる　二条の〈院后〉ゐ給はぬによりて、其所

の体也」（『伊語聴説』）、「ウチアレタルヤウニモアル歟。又アナガチ、サハナクトモ、人ノスマズ、主人ノナキ所ハ、アレネドモアレタルヤウナルモノ也。業平ノ心ニ、其人ノナケレバ、荒タルヤウニ、オボユルナルベシ」（『惟清抄』）と注されているように、かつての住人・高子の不在を意味する詞として物語中で機能すると読解されていた（『愚見抄』・宗祇注でも同様）。また、高子と引き裂かれた不本意な別れから一年が過ぎるということを示す「去年」、場面の情景を構成する景物である「梅」「月」が詠み込まれている。「月やあらぬ…」を本歌取りするのではなく、その和歌が詠まれた状況説明の部分から詞を拾い上げて一首を構成し、失った恋を偲ぶ内容を表現しているのである。

こうした方法は、単独では章段の文脈を想起させうる固有性が弱くとも（但し「あばらなる板」は諸注釈で取り上げられ、〈伊勢詞〉として機能しうる）、複数の詞・題材が組み合わされることによって、物語と同じ情景が描出されて章段が喚起される。しかも、和歌を本歌取りするだけではこぼれ落ちてしまう要素をすくい上げることにもなる。この二首は、地の文の詞を複数取り入れることにより、和歌の三十一文字の中に章段（もしくは場面）のエッセンスを凝縮していると考えられる。

またこの二首には、主人公の心情はほとんど詞に表されてはいない。しかし背景に物語が喚起されることで、物語中では和歌に詠まれていた主人公の心情が一首の中に投影される。地の文を用いながら、用いられていない作中和歌の本歌取りに等しい効果を持たせているのである。

五、正徹との比較

ここまで検討してきた実隆の方法は、これまで用いられることの少なかった『伊勢物語』の地の文から詞を摂取して和歌に詠み込むものであった。

第一節にも述べたように、地の文の利用が少なかったとはいえ、実隆以前から、地の文を摂取した和歌を詠む歌人は存在した。近い時代では、正徹にその傾向が著しく認められる。正徹の書写奥書を有する『伊勢物語』は多く、古注を朱で書き入れた正徹自署・蜷川智蘊筆『伊勢物語』も現存している。[11]『伊勢物語』が歌書として重視されていたことは冒頭に先述したが、『正徹物語』には「本歌に取る事、草子には源氏の事は申に及ばず、古物語もとるなり。住吉・正三位・竹取・伊勢物語をば、皆歌をも詞をもとるなり」という記述があり、正徹が『伊勢物語』を歌書としてではなく物語として享受し、和歌にも摂取していたことが窺われる。

正徹の『伊勢物語』摂取については、すでに小泉和氏[12]による論考がある。小泉氏は正徹の方法について、「歌人としてというよりも、講釈者として（…中略…）物語の構想をより詳しく分析し再現し説明する」と述べ、「本歌取りとして見る時、あまりにも稚拙で図々しくて投げやりにみえる」「いずれも伊勢物語の地の文のことばの単純な移し替えに終っている」「地の文における珍しい詞、細かな描写などの注目すべき諸所を拾って、これを要約、或いは意訳したものである」と指摘し、正徹が地の文から〈伊勢詞〉を選択して詠み込む方法に否定的な評価を下している。

『伊勢物語』地の文から詞を摂取した正徹の和歌を見てみよう。

（八月）廿日、草庵の月次、ふしながらもと人々申されしかば、いなみがたくて／田鳴

都鳥羽かくことやすみだ川田のもの鳴のほどにまがはく（『草根集』七一一一）

この歌は、九段の隅田川の場面を踏まえたものである。「都鳥が羽をかくことだ、この隅田川で。田の面の鳴ほどの大きさだと見間違えるような」というのは、「さるおりしも、しろきとりの、はしとあしとあかき、しぎのおほきさなる、みづのうへにあそびつゝいをゝくふ。……『これなむ宮こどり』といふをきゝて」に依っている。つまり、『伊勢物語』文中の、都鳥が鳴と同じくらいの大きさであるという説明を和歌に詠んだものである。題は「田鳴」であり、

初句に都鳥が出てくるのは唐突であるが、『伊勢物語』の文脈から、この都鳥は田の面の鳴と間違えるくらいの大きさなのだ、という結びつきでまとめている。地の文を踏まえているとはいえ、隅田川に旅する業平の心情や情景描写にはほど遠く、説明的な内容にとどまっている。

（二月）五日、修理大夫の家にて月次ありしに／石面岩

山科の岩ほふるくはのこるらん苔をきざみし人のことのは（『草根集』五四四八）

七八段の、山科の宮で業平が石を献上する際に「あおきこけをきざみて、まきゑのかたにこのうたをつけてたてまつりける」とある場面を踏まえている。つまり、正徹歌の意は「山科の巌に古く残っているのだろう。苔を刻んだ業平の和歌の言葉が」というもので、山科の宮での逸話を想起しながら、今もなおそれが残っているだろうと詠むのだ。これも、「石面岩」という題から山科の宮の場面を想起して和歌に詠んだとはいえ、歴史的故事として七八段の内容を喚起するにとどまっており、物語が持つ心情等は取り入れられていない。

ここでは特徴的な二例を取り上げた。正徹の態度は、地の文の珍しい詞や趣向を取り入れてはいるが、小泉氏が指摘するように「説明的」「要約・意訳」と言ってよく、それ以上の展開が認められない。実隆が詞を拾い上げて物語の場面を三十一文字の中に再構成するという密度の濃さや、物語中に描かれる業平の心情を詞の背景に揺曳させるという姿勢も見いだせない。

逆に言えば、実隆の姿勢は「地の文における珍しい詞、細かな描写などの注目すべき諸所を拾って、これを要約、或いは意訳したもの」ではなく、場面の構成要素をそれぞれの詞によって喚起させながら、一首の中に章段（もしくは場面）のエッセンスを、登場人物の心情まで含めて凝縮して表現しようとしていると考えられるのである。また、視点を変えると、正徹とは異なる注釈の姿勢、つまり一つ一つの詞を単に説明的に注釈するのではなく、物語の中で

どのような役割を担っているのかを読み解く立場から、それぞれの詞が情景や心情描写としていかに機能しているかを自詠から浮かび上がらせているという見方もできる。

もう一点、実隆が正徹とは異なる点がある。正徹の次の歌を挙げる。

くだかけのをくるもつらし別ぢの野らにすむてふきつにはめなで

（『草根集』七五三二「（五月）廿日、草庵月次に／恨鳥別恋」）

この「くだかけ」「きつにはめなで」は、『伊勢物語』一四段の「夜もあけばきつにはめなでくだかけのまだきになきてせなをやりつる」に基づく詞である。「きつにはめなで」は正徹以外に摂取例を見いだせないが、「くだかけ」は正徹の他にも、『風情集（藤原公重）』三四〇・『覚綱集』四九・『正治初度百首』七九五（忠良）・『玉吟集』二四八四と、院政期から摂取例が散見する。実隆の同時代歌人にも、『下葉集（堯恵）』五四一・『春夢草（肖柏）』一一四七・『邦高親王御集』九九の例がある。『伊勢物語』講釈を行った堯恵と、宗祇の講釈を書き留めた『肖聞抄』の著者・肖柏の例があることに注目される。

各種注釈・講釈聞書でも取り上げられる難義語であり、『伊語聴説』には「きつは狐也。下略也。はめ、食也。くだかけ、鶏也。くだは細也。小鶏と、一条殿御説」、『覚桜注』に「クダハ家、カケハ鶏也」と注し、『惟清抄』では和歌の引用本文に「……クダ（家）カケ（鶏也）ノマダキニナキテセナヲヤリツル　東国之習、家ヲクダト云」という注記があり、注文に「クダカケハ、家鶏也。只カケトバカリモヨメリ」と記している。「くだ」を「細」と解していたのが「家」の意で理解するようになったという変化は認められるが、「くだかけ」が家鶏の意であるという理解は同じである。

一四段のこの歌は、陸奥国で男に懸想した女が、男と一夜を過ごした後、夜明け前に男が帰って行ったのを怨じて詠んだ和歌である。男への求愛の歌も、「中〳〵に恋にしなずはくはこにぞなるべかりけるたまのをばかり」と、夫婦

仲の良い蚕になりたいなどという、和歌の雅やかさを欠いたものだった。この章段の眼目は、陸奥の女の詠んだ和歌が、題材の上でも詞の上でも、和歌に求められる雅やかさを欠いてしまった点にある。「くだかけ」「きつにはめなで」の珍しさとは、そもそも業平（そして『伊勢物語』作者が）批判した田舎くささであった。

後世の歌人たちは、珍しさへの志向から、「くだかけ」を鶏と同義の詞として用いている。しかし、実隆は古典的な歌ことばを逸脱するこうした詞を用いて和歌を詠んでいない。少なくとも、残されてはいない。実隆にとって〈伊勢詞〉とは、『伊勢物語』の中で面白く、優れた詞であった。物語内で批判されるものは、いかに珍しくとも摂取すべき対象ではなかったのである。『伊勢物語』を新しく珍しい詞の宝庫としてではなく、あくまで古典・規範として捉える実隆の姿勢が窺われるのである。

結びに

実隆の『伊勢物語』摂取は、作中和歌の本歌取りも数多い。その一方で、小稿で検討してきたような地の文の詞を〈伊勢詞〉として積極的に用いてきた。その背景には、講釈・注釈に基づいた丁寧な読解があった。それによって、これまで注目されてこなかった地の文の情景描写や心情描写が、章段を代表する詞として取り上げられることになった。題の表現にふさわしい場面を選び出し、物語を想起させる和歌を詠むにあたって、従来用いられてきた作中和歌ではなく地の文の詞を用いる。勅撰和歌集に入集することも多い『伊勢物語』の作中和歌ではなく、地の文の詞を用いることは、実隆が地の文にまで精通していることを示す。また、読者がそれに気付くかどうかを試されるものでもあり、気付いた時にはともに地の文の細かな描写の魅力を共有できる。『伊勢物語』という古典ではあるが、和歌よりも注目度が低く、精通している人が多くない地の文を用いた和歌を詠むことは、当時、『伊勢物語』講釈の授受者が発見した

知識と創作の往還であったと考えられるのである。

和歌に摂取される〈伊勢詞〉は時代を下るにつれて増えてゆく。それまで用いられることのなかった詞を掬い上げて用いるのは、歌人たちにとっての挑戦であった。実隆が用いた詞が後の時代の歌人たちによっても用いられるようになった例もある。しかし、実隆にしか用例の見出せない詞も多い。実隆が掬い上げた詞は、散文的で説明的なものもあり、一回限りの挑戦に終わったものがあったのも事実である。

実隆の挑戦は、講釈者として『伊勢物語』を読解した経験に基づくものではあるが、それと同時に、講釈を行いうる知識と読解の深さを持つ者として、また後柏原天皇の信任厚く堂上歌壇を支える歌人として、自身の知識と歌才を示す意図もあったと考えられる。『伊勢物語』の表現を摂取する実隆の方法は、章段の内容や作中和歌だけではなく、地の文の細かな表現にまで目を留め理解し、それを新たな和歌表現に活かすことで、さらにその表現の持つ可能性に光を当てるという、古典主義に立脚しながら新たな和歌表現を模索する試みであったと位置づけられるのである。

和歌の引用本文と歌番号は、私家集は『新編私家集大成』（CD-ROM版、古典ライブラリー）に、それ以外は『新編国歌大観』（角川書店）に拠る。それ以外の引用は以下の通り。『伊勢物語』…伊井春樹『伊勢物語 実隆筆天福本』（昭45・愛媛大学古典叢刊刊行会）、『伊語聴説』…陽明文庫蔵本、『惟清抄』…天理図書館善本叢書43『和歌物語古註集』（昭54・八木書店）、『逍談称聴』…宮内庁書陵部蔵本（154―62）、『覚桜注』…宮内庁書陵部蔵本（庭30）、『文明九年本肖聞抄』…伊勢物語古注釈書コレクション（笠間書院）、『冷泉家流伊勢物語抄』『文明十二年本肖聞抄』『伊勢物語宗長聞書』…片桐洋一『伊勢物語の研究〔資料篇〕』（昭44・明治書院）、『十巻本伊勢物語注』

『伊勢物語山口記』…鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊（八木書店）、『伊勢物語愚見抄』…冷泉家時雨亭叢書（朝日新聞社）、『詠歌大概』…新編日本古典文学全集『歌論集』（平13・小学館）、『正徹物語』…小川剛生『正徹物語』（平23・角川ソフィア文庫）

注

（1）伊井春樹『伊勢物語 実隆筆天福本』（昭45・愛媛大学古典叢刊刊行会）解説、宮川葉子『三条西実隆と古典学』（平7・風間書房）第二部第三章第四節「天福本伊勢物語の伝流」

（2）大津有一『伊勢物語古註釈の研究 増訂版』（昭61・八木書店）第二章第七「三條西実隆の講筵と註釈」、青木賜鶴子①「三条西実隆における伊勢物語古注――「伊語聴説」「称談集解」に触れつつ――」（『百舌鳥国文』6、昭61・10）、同②「三条西実隆の伊勢物語講釈――『覚桜注』をめぐって――」（『女子大文学（国文篇）』平16・3）、同③「三条西実隆講・清原宣賢筆記「伊勢物語惟清抄」について」（『百舌鳥国文』平18・3）、注（1）宮川著書第二部第三章第五節「実隆の伊勢物語講釈と使用テキスト」、天理図書館善本叢書43『和歌物語古註集』（昭54・八木書店）「伊勢物語惟清抄」解説（片桐洋一執筆）、伊藤敬『室町時代和歌史論』（平17・新典社）第五章四「実隆の視点」

（3）拙稿①「陽明文庫蔵『伊語聴説』解題と翻刻」（『調査研究報告』38、平30・3）参照。

（4）拙稿②「後柏原天皇御会「伊勢物語詞連歌」の位相――〈伊勢詞〉の展開から――」（『隔月刊 文学』12―4、平23・7）。

（5）院政期の『伊勢物語』摂取については、田口暢之「藤原顕季の古歌摂取意識――『万葉集』と『伊勢物語』を中心に――」（『和歌文学研究』112、平28・6）参照

（6）拙稿③『『伊勢物語』と藤原俊成の歌論・実作――建久期後半、特に『御室五十首』をめぐって――」（山本登朗編『伊勢物語

享受の展開』〈平22・竹林舎〉所収）参照

（7）正徹から実隆への影響については、豊田恵子「「心あるあまのなどかなからん」考――三条西実隆による正徹の趣向摂取について――」（『叙説』33、平18・3）、松本麻子「歌連歌と連歌歌――正徹の和歌を軸に――」（『中世文学』58、平25・6）に指摘がある。

（8）なお、実隆ほど特異表現を取り入れる傾向は強くないが、実隆と共通した詞の摂取・摂取の方法を見いだせるのが、後柏原天皇である。二例挙げておく。

〈紅葉の千種〉

→神無月のつごもりがた、きくの花うつろひさかりなるに、もみぢのちぐさに見みるおり、……（八一段）

○実隆

庭の面の紅葉のちぐさかげふかみうつろひそむるきくの上露

（『雪玉集』五三八〇・文明十六[1486]年七月十六日結題五十首和歌「紅葉帯菊」）

九月九日、公宴 詩歌同 章長卿献レ之云云／同題（黄花独有香 各分二一字一）

香にゝほふたぐひは菊の外もあらじ色は紅葉の千ぐさながらに

（『再昌草』一八三〇・永正[1509]七年）

水の面に紅葉の千種影はあれど浪の花にはしら菊の花

（『再昌草』四二四七・大永[1522]二年九月「重陽公宴　菊花臨水」）

九日、右京大夫入道、かたえ紅葉したる枝をゝくりし、み所たぐひなかりしかば、内にたてまつりたりしに、女房の文にて

おなじえの紅葉の千ぐさ百くさに花をもまたぬさかりとぞみる

（『再昌草』四八六二・大永[1525]五年八月）

たちぬるゝ袖もや色に紅葉ゝのちぐさをわくるもりの下露

（『雪玉集』七六三三・詠三十首和歌・秋・紅葉）

○後柏原天皇

野辺の色や深山の秋にうつるらん紅葉の千種うすくこき色（『柏玉集』二二五八・文亀[1503]三年自桃花節禁裏御着到和歌・秋・紅葉

三条西実隆における『伊勢物語』摂取と注釈

〈布引の滝・白絹・袖のせばき〉　／同・九八九・「紅葉」、結句「うすくこき比」／『雪玉集』四五六二）

→「いざ、この山のかみにありといふぬのびきのたき見にのぼらん」といひて、のぼりて見るに、そのたき、物よりこと也。ながさ二十丈、ひろさ五丈許なるいしのおもて、しらきぬにはをつゝめらんやうになむありける。……ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるかそでのせばきに（八七段）

○実隆

廿六日、永元寺美絹一疋をくられし返事に

布引の滝かとぞおもふしらきぬのかゝるをつゝむ袖のせばきに　（『再昌草』解題五八九・享禄二年十一月）

○後柏原天皇

雲霧の空につゝみてしらきぬのはたばりせばき布引の滝　（『柏玉集』一六九七「布引の滝」）

『実隆公記』文明十八年（一四八六）七月七日条には、「伊勢物語愚本依レ仰令レ借進二上親王一了」とあり、実隆所持本を当時親王であった後柏原天皇に貸している。また、『言国卿記』明応七年（一四九三）四月十六日条には、宮中で堯恵の講釈があり、後柏原天皇もそれを聴いたことが記されている。ここに実隆の名前は見えないが、その後、『実隆公記』明応七年六月二日条に「入レ夜於二親王御方一数刻御雑談、定家卿自筆伊勢物語［武田所持本、］披二見之一、殊勝物也、昨日堯恵彼物語講尺終功［云々］、少々義理等尋申入之処、有レ仰、不審事等在レ之、不レ能レ注レ之」、同四日条には「伊勢物語禁裏御本依レ仰校合直付進二上之一了」と記されている。この記事は従来、定家自筆本の伝来や実隆と定家自筆本との関わりを示す記事として注目されてきたが、それにとどまらず、後柏原天皇と実隆との『伊勢物語』を挟んでの親しい交流が読み取れる。実隆と後柏原天皇の間には『伊勢物語』を和歌に摂取する方法についても共通する問題意識があったと考えられる。

（9）前掲注（4）拙稿②

（10）青木賜鶴子③「伊勢物語旧注論序説――一条兼良と宗祇と――」（『女子大文学　国文篇』昭61・3）

(11)『伊勢物語古注釈書コレクション　第一巻』(平5・和泉書院)に影印所収。
(12)小泉和「草根集における正徹の伊勢物語受容について」(『フェリス女学院大学紀要』11、昭51・4)

【付記】本稿は第五十九回度和歌文学会大会(平成二十三年十月十三日於関西大学)における口頭発表「室町後期和歌における『伊勢物語』摂取と注釈――三条西実隆と後柏原天皇をめぐって――」にもとづき成稿したものである。発表の際にご意見やご教示を賜った先生方に厚く御礼申し上げます。なお本稿は科学研究費補助金(若手研究(B)研究課題15K16695および基盤研究(C)研究課題17K02450 9による研究成果の一部である。

(本学教授)